



第13回日本リハビリテーション栄養学会 学術集会 in 三重

大会長

三重大学大学院医学系研究科リハビリテーション医学分野 百崎良

第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会を2024年3月2日（土）、三重県・四日市市文化会館にて開催させて頂くことになりました。現在、実行委員長の中原さんを中心に、準備を進めております。本学術集会のテーマは「デジタルヘルス時代のリハビリテーション栄養」です。近年、医療の各分野において、デジタルヘルステクノロジーの活用が進んでおります。リハビリテーション栄養の領域でもデジタルヘルステクノロジーを効果的に活用する基盤整備が必要であると考え、このテーマとしました。現地開催プログラムを含めオンデマンド配信予定で、学生・研修医の方は、参加費が無料となりましたので、是非ご参加ください。

また、ポストコングレスセミナー（申し込み不要の無料公開セミナー）を2024年3月10日（日）、cluster（クラスター）にて開催予定です。クラスターにログインするのが難しい方はYouTube LIVEでも視聴することが可能ですが、臨場感が違いますので、是非クラスター会場に来ていただき、リハビリテーション栄養におけるデジタルヘルス活用に関する有意義なディスカッションができればと考えております。また、多くの方に生成AIを体験してもらう機会を提供するために、AIアートコンテストを同時開催予定で、応募作品を募集しております。バーチャルリハビリテーション栄養学会にて受賞作品を決定しますので、奮って御応募ください。多職種、多領域の方々が集い、語り合い、実りある学術集会にしたいと考えておりますので、多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

学術集会ホームページ：<https://jarn2024.com/>

理事長新年度挨拶

宮城厚生協会 坂総合病院 リハビリテーション科
藤原大

13th | 日本リハビリテーション栄養学会学術集会

デジタルヘルス時代の
リハビリテーション栄養

2024
3/2 SAT

会場 四日市市文化会館
開催形態 現地+オンデマンド

POST CONGRESS SEMINAR
ポストコングレスセミナー
日時 2024年3月10日（日）
開催形態 メタバース

大会長 百崎 良 | 三重大学大学院医学系研究科リハビリテーション医学分野
実行委員長 中原 さおり | JA三重厚生連絡部中央総合病院栄養管理科

JARN / Japanese Association of Rehabilitation Nutrition

本News Letterをご覧の皆様は、どのような新年度をお迎えでしょうか？従来の環境で新たな取組を模索されている方、または新たな環境で期待と不安を抱えている方など、様々かと思えます。まずは、皆様とその周りの方々が心身ともに健康で日々を過ごせることを願います。

2024年度には、診療報酬・介護報酬・障害福祉サービス等報酬の同時改定が行われます。その中で、リハビリテーション・栄養管理・口腔管理の連携強化と推進が強く意識されています。この「三位一体」の連携と関わりは、従来から私たちが重視して実践と研究を進めてきた事項そのものです。10年余りの知見の蓄積が国の施策として反映されたとともに、ここからがまさに私たちの「出番」とも言える状況になりました。それぞれの立場で、更なる実践と研究を進めていきましょう。

この1月には、能登半島を中心として甚大な被害を引き起こす震災が発生しました。被災地在住の皆様には心よりお見舞い申し上げます。また、現地で被災地支援にあたっている方々にも心より敬意を表します。思えば、当学会の前身である「日本リハビリテーション栄養研究会」が発足したのは、東日本大震災が発生した2011年でした。高齢社会では平時でも問題となるサルコペニア・フレイル・低栄養は、災害後にはより顕著な問題となります。対象者一人ひとりの状況だけではなく、社会全体の動きに敏感に反応し行動することが求められます。ともに力を合わせて困難を乗り越えていきましょう。

新理事紹介

新潟医療福祉大学リハビリテーション学部理学療法学科 井上達朗

新たに日本リハビリテーション栄養学会の理事に就任し、この貴重な機会にご挨拶をさせていただきます。新潟医療福祉大学リハビリテーション学部理学療法学科の井上達朗と申します。日本リハビリテーション栄養学会は、この激動の時代の中でますます重要性と存在感を増すと考えられ、その進展に僅かながらでも貢献できるよう精進いたします。

私はこれまで理学療法士として急性期病院に勤務し、2020年から現職で教育者・研究者としてリハビリテーションと栄養に関する研究に取り組んできました。本学会では、今年度から主にTNT-rehabilitationの運営を担っております。会員の皆様はもちろんのこと、本学会入会をご検討の皆様にも充実した教育体制が提供できるよう精進いたします。これからも学会の一員として、使命感を持ち、責任を果たしてまいります。何かご質問やご提案がございましたら、どうぞ気軽にお知らせください。どうぞよろしくお願いいたします。



NTT東日本関東病院 栄養部 上島 順子

この度、リハビリテーション栄養学会の理事に就任いたしました上島順子です。この貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。学会のさらなる発展に寄与できるよう、精一杯努力して参りますので、ご指導とご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願いいたします。

リハビリテーション栄養は、リハビリテーションと栄養の単なる融合ではなく、医療・介護現場での対象者の生活の質向上を目指す多職種協働の推進に欠かせないキーワードであり、実践のためのコンセプトです。この重要な概念と臨床実践を、より多くの医療・介護従事者に広めることが、私の理事としての使命であると考えています。その実現のため、リハビリテーション栄養に関する情報の発信強化と、会員の皆様が臨床で実践しやすい環境の整備に向けた事業展開を積極的に進めて参りたいと存じます。理事長はじめ理事の先生方と協力しながら、魅力ある学会活動が出来るよう、また、学会のさらなる繁栄と会員の皆様のご期待に応えられるよう、理事としての任期中尽力致します。学会活動を通じて、リハビリテーション栄養の価値を高め、医療・介護現場における実践の質を向上させることができるよう、会員皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。



名古屋学芸大学管理栄養学部 宇野千晴

このたび、新たに日本リハビリテーション栄養学会の理事を拝命いたしました、名古屋学芸大学管理栄養学部の宇野千晴と申します。理事という重責に身が引き締まる思いでおります。私は、病院勤務時代にリハ栄養に出会い、臨床研究の実践と、そこで得た知識を臨床に活かすことによって、QOL向上につながることを学ぶことができました。リハ栄養学会は成長できる場が非常に多くあります。今後は、本学会から得た多くの学びと、これまで培ってきた経験をもとに、さらなる裾野を広げるべく、微力ではございますが、本学会の発展に貢献できるよう責務を全うしていきたいと考えております。

会員皆様のますますのご指導とご鞭撻のほど、何卒、どうぞよろしくお願いいたします。



大和大学保健医療学部 鈴木瑞恵

このたび、新理事を拝命いたしました大和大学保健医療学部の鈴木瑞恵と申します。言語聴覚士として臨床現場で勤務する中でリハ栄養と出会い、早10年以上の年月が経ちました。リハ栄養の概念は研究会発足当初と比べると大きく広がり、発展してきたように思います。一方で、リハ栄養を必要とする対象者の方々への還元は、まだまだ不十分だと感じる部分も多くあります。言語聴覚士は摂食嚥下のみならず、コミュニケーション面でも対象者を支援する職種ですが、いずれの観点においてもリハ栄養が重要です。言語聴覚士として、そして理事として、今後もリハ栄養の啓発・発展に寄与できるよう、精一杯務めたいと思います。



災害とリハ栄養紹介

尚絅大学 高山仁子



能登半島地震から2か月が経とうとしています。被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。未だ厳しい状況の中現地で奮闘される多くの方に応援と敬意を表します。熊本地震の経験をふまえ、改めて災害時のリハ栄養について考えてみたいと思います。災害時のリハ栄養の大切なキーワードは、令和6年度の診療報酬改定でも注目されている“リハビリテーション、口腔、栄養”です。災害時はフェーズ毎に様々な課題が生じます。発災から24時間以内は生命を守ることが最優先、発災72時間以内も食事確保が難しい場合が多くそのタイミングも安定しませんが、この時期こそ口腔ケアが大切です。4日目以降は支援物資等が入ってきますが、栄養バランスは偏りやすく、脱水、便秘、感染症などが起こりやすい時期です。薬の問題や食事形態、アレルギーにも配慮が必要です。喪失感や不安から閉じこもりがちなので少しずつでも体を動かし廃用を予防します。1カ月を過ぎると慢性疾患の悪化や、低栄養状態の悪化が課題となります。行政や各種支援団体とも協働して栄養の過不足を補う工夫が必要です。経腸栄養剤や特殊食品、水分の備蓄も重要です。このようにフェーズ毎に比重は変化しますが、災害時こそリハ・口腔・栄養の三位一体の力が発揮されると考えます。また、忘れてはならないのが“こころのリハ栄養”です。先日、被災地で奮闘されている管理栄養士が、厳しい環境の中、支援物資をコンビニ風に配置するのが小さな楽しみとの投稿を読み、ほっこりした事を思い出します。震災時、支援物資の中にあつた小豆を使ってぜんざいを作ったことがありました。ほんの少ししかないそのぜんざいを患者さんも職員もボランティアの方も嬉しそうに食べる姿を見て、明日も頑張ろう、という気持ちとともに、災害時の食には癒しの力があることを実感したものです。災害時のリハ栄養は、身体だけではなく心も元気にしてくれる。そんな役割を期待します。現在当会HP上では「災害支援とリハビリテーション栄養」について無料公開されています。災害はいつどこでも起こり得ます。ご一読頂き明日の備えに役立てて頂ければと思います。

論文紹介

京都済生会病院
塩濱奈保子



Prevalence and prognosis of cachexia according to the Asian Working Group for Cachexia criteria in sarcopenic dysphagia: a retrospective cohort study

Wakabayashi H, et al. Nutrition.2024 DOI:10.1016/j.nut.2024.112385

サルコペニアの嚥下障害患者において、Asian Working Group for Cachexia (AWGC) 基準による悪液質の有病率と予後を検討された研究です。

日本のサルコペニアの嚥下障害データベースに登録された467例のうち、サルコペニア性嚥下障害と診断された271例を対象にした後ろ向きコホート研究で、サルコペニアの嚥下障害患者の36%に悪液質が認められ、嚥下機能とADLに差は認められなかったが、死亡率は悪液質で有意に高かった。「すべてのサルコペニアの嚥下障害患者において悪液質を考慮すべきであり、AWGC診断基準は悪液質の診断に有用であろう。」と締めくくられています。

AWGS基準による悪液質の診断基準が発表され、日常業務で悪液質の評価がしやすくなったと感じています。サルコペニアの摂食嚥下障害患者さんでは、早期リハ、攻めの栄養療法、口腔の正しい評価とケアなど三位一体の取り組み、リハ薬剤ももちろんですが、ACPなどでは悩ましいところも出てくることもあり、連携の重要性を常に感じています。多職種で診断推論し、課題を整理しつつ、目の前のゴールだけでなく、人生のゴール設定までを考えながらチームで取り組む中の一つとして、悪液質を考慮していきたいと思います。

リハ栄養実践報告

EST (Endbite Support Team) 代表
摂食嚥下障害看護認定看護師

平畑 典子



認定看護師を取得してから嚥下障害に取り組む中で、認定研修での知識ではどうにもならない嚥下障害に多く出会い、悩んでいました。そんな中JSPEN神戸で若林先生のサルコペニアの嚥下障害についての講演を拝聴し、これだ！！と思ったのが私とリハ栄養との出会いでした。特に嚥下障害を起こすような疾患ではないのに嚥下障害を起こす、しかも結構重症でどんどん進行していく。私の父も透析のシャント造設が上手くいかず、手術を繰り返すうちに栄養低下に陥り嚥下障害を起こしてしまったということもありました。そんなわけでサルコペニアの嚥下障害は私の天敵となってしまったのです。

定年退職後自宅近くの医療療養型病院で嚥下と栄養のみの勤務がさせてもらえるようになり、入院患者の低栄養とサルコペニアを調べてみると低栄養はほぼ100%、サルコペニアも90%となりました。入院時嚥下評価するとゼリーレベルで介助なら食べられるが、前病院からは絶食で転院して来られる方が多く、栄養低下と活動低下でサルコペニアを起こしたのではないかと想像されました。

ここで急性期病院に乗り込んでも全体の知識が低い中では実現は難しいと思い、まずは知っている人を、仲間を増やすことと考え、医療介護者対象で栄養と嚥下の勉強会を開催することを思いつきました。嚥下を訪問で評価されている伊丹市の歯科医師の辻先生に副代表をお願いし、EST (Endbite Support Team) を令和元年に立ち上げました。リハ栄養学会や摂食嚥下リハビリテーション学会で出会った先生方に講師をお願いし、伊丹と池田市で集合型研修を月一回開催しました。コロナからはオンラインに変更し、全国の講師の先生方をお呼びできるようになっています。一般の方々向けにYouTubeでもESTチャンネルで配信を行いました。オンラインでは地元の参加者が少ないことが悩みの一つですが、今後コロナが落ち着いたら、集合型との併用で開催したいと思っています。栄養と嚥下の知識を広めて、サルコペニアによる嚥下障害を起こす方が少なくなるよう支援していきたいと思っています。

TNT-Rehabilitation報告

日本赤十字看護大学大学院

神田 由佳



ESTホームページ



ESTチャンネル (Youtube)



TNT-リハビリテーションに初参加してきました。久しぶりの対面開催への出席だったので、緊張しましたが講師の先生のおもてなしと45名ほどの参加者の皆さんとアットホームな雰囲気の中で楽しく学ぶことができました。研修は、講義・ワークショップ・ケーススタディの3部構成となっており、リハビリテーション栄養の基本的事項について、体系的に学びを深めていくことができました。特に、SMARTな目標設定について、前田先生が丁寧に教えてくださり、苦手意識が克服できたのは大きな成果です。

午前の講義は、1つのセッションが30分程度と短く、集中力が保たれたままテンポよく展開されていきました。基本的な知識の確認だけでなく、臨床実践がイメージしやすいことで、難しさを感じることや、わからないまま置いていかれるような感覚を抱くことはありませんでした。午後からのワークショップとケーススタディは、グループワーク方式でした。1つ1つのグループに、講師の先生が、ファシリテーターとしてついでくださったことで、馴染むのが早く、活発な意見交換ができました。最初のワークショップでは「リハビリテーション栄養ケアプロセス」を、グループで議論しながらゆっくり症例展開しました。その後、臨床でよく出会う4症例については、実践さながらのNSTカンファレンスのように、短時間でケアプロセスを展開していく方法を学びました。

コロナ禍を経て、オンラインでの研修が増え便利と感じることも多くあります。しかし、対面研修の良さは、同じ志を持った仲間と話すことで士気が上がり、明日からやってみよう！できるかも！という気持ちにいつも以上になれることにあるのかな、と思います。まさに、TNT-リハビリテーションは、1日でそれが叶う有意義な研修だと思いました。



「一汁一菜でよいという提案」 土井善晴

健康意識が高まっている昨今、TVや雑誌では健康情報が頻繁に取り上げられ、巷には様々な情報や健康食品が溢れています。数多の情報に晒され、結果として偏った食生活になったり、日々の食事作りが負担と感じている方もいらっしゃるようです。

食事は365日毎日するものです。それが負担になっては、せっかくの栄養も身につかないでしょう。そこでお勧めしたいのが、土井善晴氏が提唱する「一汁一菜」という、長年の日本の食文化に沿ったシンプルな食事スタイルです。糖質源のご飯とともに、タンパク源の卵や豆腐、ビタミン源の野菜をたっぷり入れた味噌汁、そして腸内環境を整える発酵食品などをおかずとした組み合わせは、栄養面からもバランスが取れています。毎食主菜副菜などに頭を悩ましながら用意せずとも、シンプルな組み合わせで栄養が摂れるこの和食スタイル、体が不自由になってきた高齢者や忙しい現代人にも取り入れやすいのではないのでしょうか。本書では一菜には漬物となっていますが、タンパク質源を取り入れれば、低栄養対策にもなります。筆者は、「良く食べることは、良く生きること」と述べています。「食べる」はどう生きることかという姿勢に直結し、人生の土台や背景となる、と。料理研究家の視点から、食事の大切さを説いた本書、ぜひご一読ください。

今月の数珠つなぎ

毎号一人、①リハ栄養に関すること②前者からの質問（お題は自由）の2項目について語っていただきます！

今回は福岡青洲会病院、理学療法士の田中拓樹さんからのMBで

郡山青藍病院 廣瀬 庸介さんです



①リハ栄養との出会い

10年程前に京都で若林先生の講演を聴いたのが、私とリハ栄養との出会いです。初めて耳にする「リハ栄養」という分野に一人で参加するのとも感じ、職場のPTと管理栄養士の3人で受講しました。講演が始まって数分で、それまで筋力、機能向上ばかり考えて、リハを施行していた自分の目から、鱗が落ちてくるのはこの事かと感じました。受講後の帰りの電車で、病院の多職種スタッフにこの受講内容を早く伝えたくて、3人で盛り上がりました。その後、院内でのリハの取り組みが大きく変わっていき、成果も上がりました。また、このことがきっかけで、リハ職以外のスタッフとの関りも増え、リハ栄養を実践するための仕組み作りが多職種で取り組めるようになりました。

②現在の取り組みと課題

現在は職場が変わり、「リハ栄養」を知ってもらうために、管理栄養士、リハスタッフとで他職種スタッフに向けて、勉強会を開催したり、論文を配りながら、臨床をすすめています。リハ栄養の大切さや面白さ理解してもらうための近道は、評価をしっかりと行い、実績をあげることと思っています。また実績を上げるために、自分自身がより勉強していくことだと感じて取り組んでいます。

病院にも考え方や風土、経営状況がそれぞれ違うと思います。リハ栄養に必要なものが、すぐにそろっているとは限りません。リハ栄養が、優先順位を少しでも上位にもってきてもらえるように、経営陣にも噛み砕いて説明していくことが課題だと感じています。

編集後記

2024年は元日に能登半島地震、1月2日に羽田空港地上追突事故で始まり、今年はどんな年になるんだろうと不安な幕開けでした。News Letterでは、熊本の高山先生に災害支援の記事をご執筆いただきました。災害対策を今一度見直してみる機会になればと思います。今年のリハ栄養学会の理事改選では4名の新理事が誕生しています。本紙で新理事の皆さんをご紹介しているので是非お目通し下さい。見ていただきたい記事満載ですが、最後に一言。いよいよ来月、リハ栄養学会学術集会 in 三重が開催されます。紙面だけでなく対面での交流も大事にしたいです。是非、学術集会にお集まりください。

